時枝さんとわたし

西尾実

一

時枝誠記博士が長逝されたことは、学界の損失である。親交を得ていた一人としてまことに哀惜にたえない。わたしよりも十年以上若くて、思索も健康も旺盛な時枝さんであると思いこんでいたわたしには、思い設けなかった悲しみである。国語教育や文学研究についてはまたと無い論敵で、どんなに激しいことばを言い合っても、いささかの感情のくもりも示さず、明るく、竹刀を大上段に振りかざすといった態度で攻撃の論陣をはられた態度は、めざましいものであったが、突如としてわたしの前を去られた。何ともいえない、やり場のない空白感である。

広島大学の主催で全日本国語教育協議会が開かれた時、第二日目の総会で講演された時、時枝さんの言われた中に、「国語の基礎は書きことばである。話しことばが基底だという西尾さんの説は国語教育を混乱させるにすぎない。」というような一節があった。講演後、質疑応答の機会を与えられたけれども、わたしは翌日講演することになっていたので、そこでは何も言わなかった。翌日、わたしはわたしの講演のあとでこの問題にふれ、「わたしたちは一字も書かず読まずという日は有っても、一語も言わず聞かずという日は無い。また、教育の進歩で文盲者はほとんど無くなったけれども、読み書く生活よりも聞き話す生活のほうが広い。これは調査したわけではないが、読み書く生活よりも聞き話す生活のほうが日常性が大きく、生活の機会も多いと思われる。ただ、わが国における近代以前の文化の発達は主として読み書くことばで担われ、話し聞く口ことばは文化の発達から置き去りにされていた。けれども現在は、録音やラジオの普及発達によって口ことばも

文化の発達を担うようになっている。これからの国語教育は、このような事実の認識を前提として、わが国の過去や特殊性にとらわれていてはならない。国語研究では書きことばを対象とした研究しか行われなかったけれども、これからは話しことばを対象とし基礎とした研究もおこらなくてはならない。わけても国語教育の発達は話しことばの教育を基礎として、書きことばの教育やことばの文化の教育に進むのが本道である。」というようなことを述べ終った時は、すでに急行の発車時刻がせまっていたので、お世話くださったかたがたにうながされて駅へ急ぎ、質疑応答の時間を設ける余裕が無かった。時枝さんの講演の席にわたしがいたように、わたしの講演の時には時枝さんがいたにもかかわらず、わたしの講演の場合は時間の余裕が無かった。後日、東京でお会いした時、「広島では失礼しました。」というわたしのあいさつに対し、時枝さんは「あの時のお話は切り捨て御免でしたね。」と言われた。時枝さんらしい明るさで。

これは思い出の一端であるが、時枝さんの攻勢はするどく、気持のよいほど高飛車でさえあった。けれども全然感情にこだわったところがなく、語調も態度も知的であり、理論的であったから、その論戦は相手にとっても快い論戦であった。そういう意味で、時枝さんの学問はいかにも楽しそうであった。著書にも論文にも、そういう明快さがある。いや学問だけではない。時枝さんは生活をも楽しまれた点で、まれにみる現代人の一人ではなかったかと思う。もちろん学問をも生活をも楽しまれたということは、学問にも苦しみがなく、生活にも悩みがなかったという意味ではない。むしろ人一倍大きかったかも知れない。けれども、その苦しみや悩みを克服する強さの持主であったと思う。そういう意味で精神的にも肉体的にも強靱な存在であった。

時枝さんの最期になった病魔も自分ではそれと気づかないで戦いぬかれたようだけれども、そういう豪気の底には時枝さんらしい戦いを戦いぬかれた生活があり、その深さから出てくる豪気さではなかったかと思われる。

二

時枝さんとわたしとのめぐり合いの最初は、第二東京市立中学校の国漢科に同僚として在職した時である。その時、時枝さんは東大の国語学科を卒業された新鋭であり、わたしは大正七年秋以来松本女子師範学校・長野師範学校・長野高女国語専攻科などを教えて東京にいで、成蹊高女国語専攻科を本務とし、市立二中には嘱託として毎週二日出勤することになっていた程度であるから、年令の関係からも勤務時間の関係からも、そんなに深い関係にはなっていなかった。ただ、いまも忘

れない思い出は、毎週一回、国漢科担任の打ち合わせ会の席上、国語の「虎の巻」とか「安直」とかよばれている辞書風のものが生徒間に流行していて、これを防止しようとしてもなかなか防止しきれないというような意見がわいていた時、「あんな安直など防止するかわりに全生徒に持たせ、取るべきは取り、取るべからざるものは取らないというように、批判的に用いさせるように指導すれば、便利でもあり効果的でもある。」と言われたのは、新鋭の時枝さんであったことである。現在からいうと、それはすでに指導者の常識になっていることであるが、当時としては一般の国語指導者の思い設けなかった逆用であった。わたしは二中の国語の一部を担任しながら、その教師用書を生徒の図書室に並べて自由に閲読させていた関係から、時枝さんの「安直」教室持ち込み肯認説に共鳴を禁じ得なかったことを忘れないとともに、この提案をされた時枝さんから「ただの国語の先生ではない」という感銘を与えられたことが思い出される。

その後、時枝さんは新設の京城大学助教授として赴任され、フランスに留学された翌年帰国され、市立二中が全校で平林寺へ作業に行った時、昼休みの時間に林の中に膝を並べて、これから京城大学で研究しようと思っている問題などを話されたことも、わたしには印象深かった。その一つは「漢語移入の国語に対する影響」であった。しかし、「この問題の研究は困難が多くて、わたしにとっては可能性が少ないからあきらめて中止した」と言われたのも、その後まもない時のことである。

その後十数年の京城生活は、学者としての時枝さんを作りあげるのにうらやましいほど快適な歳月であったらしい。その第一は、毎日大学の研究室に通い、そこで研究を進め、帰宅すれば講義からも研究からも解放されるという建前が押し通せたということである。第二は、大学以外の講演や執筆はしないでもすんだということである。が、「好事魔多し」。この研究時間の確立と、研究への集中ができたおかげで、好きな酒に親しむ機会が多くなり、東京大学へ転じられてからも、研究の余暇と社会的活動ののちには必ず酒に親しまれ、それが原因で不治の病に冒されたのではないかと悔やまれる。それも最後まで少しも乱れないみごとな飲みっぷりであったのにと酒友たちは惜しんでいる。

学問としては、言語を人間の主体的行為であると規定された言語過程説に深い共鳴を感じている。ただ、時枝さんは醇乎たる言語学者、わたしは文学研究から出発しているために、論争を重ねているけれども、時枝さんの言語説が貫之の「やまとうたはひとのこころをたねとして、よろづのことの葉とぞなれりける。」を拠り所の一つとしているように、わたしはそれを文学作品の成立を論じているものとしている点で、共鳴とともに対立がかもされている。したがって、わたしの文学研究は作品を対象とした分析と総合が主であるのに、時枝さんの文法研究は語論・文論に詳しくて、あらたに位置を与えた文

章論に手薄であった。それはその後『文章研究序説』で補われたことになっているけれども、依然としてわたしとの関係の問題は残されている。そして時枝さんにはその持説である言語・文学連続説があって、言語と文学とは、その境界の一線をはっきり引くことは困難であるとしている。それはそうにちがいないけれども、文学が文学としての独特な地位を言語のうえに認められなくてはならないという立場をとっているわたしからいうと、文学を言語学的に説いているだけで、文学を文学としてとりくむところまではいっていないというらみが残っている。

時枝さんは、最後に明治書院の文法講座を鑑修し、「時枝文法は時枝文法にあらず」という立場を明らかにしたいといって各巻の巻頭論文を執筆され、そのうちの三分の二を書きあげられたところで最後の病床に倒れられたという。いつのことであったか、「学説というものは学者から独立した客観的なもので、学者自身もどうすることもできないものですね。」というような意味のことをわたしに直接語られたことも思い合わせられる。それはちょうど、「悲壮」ということばが思いうかばれるほど、厳しい、堂々たる学者であり、生涯であったと思い、哀惜にたえない。

——法政大学名誉教授——